

二十歳のころ

18 期 D 班：市川 小日向 佐々木 山道

〈インタビュー動機〉

私たちがこれまで、小学生から現在に至るまで、人生のほとんどを学生として過ごしているなかで、必要不可欠なのは「先生」の存在だ。今までに出会うことのできた数多くの先生方が、普段の学校生活のほか、特に入学や門出のような節目に必ず私たちにくれていたもの、それは言葉だ。いくつもの個性が入り混じる学校で、自分が自分らしくいられるような言葉、忘れられない言葉、人生の励みになる言葉など、その種類はいくつもある。

そこで私たちは、これから人生の節目である二十歳を良く迎え、そして良いスタートをきるために、さまざまな職業の中から、この機会に先生にインタビューをしたいと考えた。そして、現在は学校長を務めており、それまでも多様な経歴をお持ちであるという齋藤先生についてグループメンバーの親族より紹介を受け、ぜひ、齋藤先生にお話を伺いたく、インタビューのご協力をいただいた。

〈インタビューさせていただいた方〉

・学校法人平成医療学園日本総合医療専門学校 校長 齋藤貴司先生

〈齋藤貴司先生について〉

本当に様々な経歴をお持ちの方であり、例えば…

- ・ベンチャー企業立ち上げ(歌広場、ジャンカラ、伊東園グループ、その他)
- ・職業訓練法人能力開発短期大学日本調理アカデミー立ち上げ
- ・YIC 京都校長補佐勤務
- ・平成医療学園専門学校日本総合医療専門学校 学校長ならびにセントラルエンジニアリング株式会社 セントラル大学学長
- ・本間 DMP(データ・マネジメント・プラットフォーム)訓練講師

〈インタビュー内容〉

・校長に就任された経緯

京都の学校に就任した直後に、自分が創った学校が廃校になるかもしれないことを聞く。同時に、学校のオーナーから「どうにかしてほしい」と頼まれる。なんとか職員は集まったが校長が不在だった。しかし、自分は当時4校の先生をしていたため、やめることができなかった。そんな時、学校の理事長が東京から京都まで3度頼みに来た。理事長直々の談判だったこともあり、事の重大さを理解し、自分が校長を引き受ける事を決意した。

・齋藤先生の座右の銘

自他和合（じたわごう）

この言葉は他の人と協力して何かを取り組む時、その人とどのように関わっていくか、和を持って交わるかを考える言葉。この言葉の明確な意味は辞書などで調べても書かれていないので、齋藤先生自身の中に意味を持つ。

・新たな挑戦をするときに意識すること

特別な意識はしない。むしろ必要以上の意識をしないように心掛けをしている。

その理由は、考えすぎることによって出来ない理由を頭の中に作ってしまうから。何事にもまずは真っすぐに受け止める事を大切にしている。この考え方は、前例のない事にも迷わず挑戦できる大きな要因となっている。

・齋藤先生の二十歳のころの様子

齋藤先生の二十歳のころは1984年。この年は日本国内、また海外においても大きなできごと・事件が発生した。そうして世の中が変化する感覚を覚えた齋藤先生の二十歳のころの様子とは。

齋籐先生は二十歳のころ、昼は工業高校に教員として勤務し、夜は大学へ通っていた。教員としては、主に助手としての仕事、いわゆる雑務がほとんどであった。そして朝早くからの勤務を終えると、自らが学生となる。このように二足のわらじを履いていた齋籐先生の一日は多忙を極めているために時間もなく、学業との両立によりお金もなかったことで、人生で一番大変だった時期であった。しかし、そんな齋籐先生を支えたのは、教員生活を送ったからこそ出会うことのできた生徒たちだった。また、この当時の生徒たちとのエピソードに関して、昼休みに、共に連続テレビ小説『おしん』を観るといった、生徒たちとの時間があったことを「すごく思い出に残っている。」という言葉と共に今回のインタビューにて振り返っていたのが印象的であった。

・二十歳のころの夢

二十歳のころからすでに、仕事と学業の両立を実現させ、身を粉にしながらも日々を過ごしていた齋籐先生であるが、そんな先生が当時描いていた夢とはいったい何か。

その答えは、「夢はなかった。」である。そもそも、人に影響を与えられる仕事をしたかったがゆえに教員になったため、もうそれは夢ではなく現実であったのだ。加えて、そこでの多忙な日々を夢を描いている間もなかったと振り返る。しかし、教員になったことでみつけた自分のやりたいことがあった。それは、”人と関わる仕事に就くこと”と”人を幸せにすること”で、それは教員でなくともできるのではないかと考え、視野を広げるためにもビジネスの世界へと一歩を踏み出したのだ。つまり、齋籐先生のいう「夢がなかった。」の意味、それは決して将来のビジョンがなかったというようなことではない。むしろ、より良い現実に向かってスタートしていた、ということである。

こうして苦労・出会い・スタートの二十歳のころを過ごした齋籐先生は、当時の自分があったからこそ、今の自分があるという。確かに、余裕のある楽な道ではなかったが、それでも、人生で最も密度の濃い時期であったと振り返った。しかし、自分が生きている時代に変化を感じつつも、今の自分を作るほどの二十歳のころを過ごしたという齋籐先生のお話を聞き、私たちは自らを照らし合わせずにはいられなかった。全く、現状のままでは今の自分が何十年先の自分を作っているとは考えられない。けれども、もし、齋籐先生が今の時代に二十歳のころならばチャンスであるという。新型コロナウイルスによって、日常が、日本や世界そのものの様子が大きく、そして目まぐるしく変化している今の時代を私たちはチャンスにできているのだろうか。チャンスにするために私たちに必要なものとはなにか。

・20歳の我々に必要なもの

一つ目は「物事を途中で投げ出さない心」である。それはつまり、始めたことは最後までやり通すということである。齋藤先生の勤務されている専門学校では退学する学生が少なからずいるようだ。それは大学でも同じことである。様々な事情があるとは思いますが自分の将来の可能性を自分自身で狭める非常に勿体無いことであると思う。二つ目は「先生、指導者のいる環境」である。何かを始める時に自分をリードしてくれる人を見つけることの重要性はみなさんご存知だろう。そういった自分のためになる環境を自発的に手に入れようとするのが重要であると先生はおっしゃっていた。最後は「専門の道」と「自分磨き」である。

「専門の道」とは専門的な資格、学問、技術の取得である。「自分磨き」とは自分の「人間性」を磨くことである。齋藤先生は20歳のころ、大学生として勉強するなか、様々な人に生活を助けられたそう。その経験により今は「人を助けたい」という気持ちが生まれたとおっしゃっていた。これこそが「専門の道」と「自分磨き」であり、成功にはこれら両方が必要なのである。

・20歳を生きていく人達へ一言

齋藤先生がお好きな言葉で「20歳の顔は自然から授かったもの。30歳の顔は自分の生き様。だけど50歳の顔にはあなたの価値がにじみ出る。」というものを教えてくださいました。これはシャネルの創業者のココ・シャネルの言葉である。要するに、若い時期は様々なことに挑戦し、また挫折することでその人の価値が生まれるということである。従って何事にもやる気を持って取り組み、挫折を恐れずに様々なことに挑戦することが必要だと学ぶことができた。

〈最後に〉

今回のインタビューで20歳の我々がどのようにこれからを過ごしていくべきなのかというところを知ることができた。挫折、失敗を恐れず、様々なことに挑戦することが図らずも将来の自分につながるのだということを学んだ。ゼミを例とすると、今後の活動のほとんどが新たな挑戦といえ、さらにグループワークの機会が豊富であるため、そこに戸惑うこともあったとしてもとにかくやってみるという前向きな気持ちと、自他和合の精神を心得れば、きっと一つひとつの活動を充実させられるだろう。こうして、今回のお話で得られたことを胸に刻み、精進していこうと思えるインタビューになった。最後に、お忙しい中私達のインタビューを承諾して下さった齋藤先生に心より感謝し、改めて御礼申し上げます。